

抗菌性の粘膜調整材

入れ歯原因 歯茎治療用に開発

岡山県産業振興財団と、ベンチャーのメデイカルクラフトン（岡山市南区古新田）、広島大などは20日、入れ歯が原因で傷んだ歯茎の治療に使う抗菌性粘膜調整材を開発すると発表した。抗菌機能を加えることで、従来の粘膜調整材よりも細菌などが付着しにくくなり、高齢者らに多い誤嚥性肺炎の予防につながるという。2019年の発売を目指す。

粘膜調整材は、入れ歯の不具合で起こる歯茎の変形や炎症の治療に使う弾性のある高分子材料。歯茎の粘膜と入れ歯の間でクッションの役割を果たす。1

2週間で交換し、粘膜の自然治癒を促す。広島大によると、調整材は極小の穴が無数に開いている構造で細菌などの微生物が繁殖しやすい。抵抗力の弱い高齢者らは、口の中で感染症を起こすほか、細菌が気管から肺に入り肺炎を発症するという。

同財団が医工連携事業としてメデイカルクラフトンと、粘膜調整材や抗菌剤を研究する

広島大、北海道大、産業技術総合研究所（茨城県）に連携を呼び掛けた。同社の親会社で医療用品メーカーのダイヤ工業（岡山市南区古新田）、歯科医療機器販売のモリタ（大阪府）も加わる。独立研究に当たり、行政法人日本医療研究開発機構が、17年度までの3年間に約1億6千万円を助成する。広島大霞キャンパス（広島市南区）で記者会見した広島大大学院の阿部泰彦准教授（歯科補綴学）は「高齢者の死因の多数を占める

計画では、抗菌成分の塩化セチルピリジニウムを調整材の材料となる粉末に添加し製品化する。添加技術は特許出願中。臨床試験などを経て、医療機器として認可されれば19年7月にも製造、販売を始める。年間売り上げ目標は7億〜8億円。

誤嚥性肺炎の予防につながる」、メデイカルクラフトンの松尾健哉社長は「国内だけでなく、海外での販売も考えている」と話した。（山本友志）